

Tangent sequence of r.v.'s について
— Hitzzenko の martingale 不等式への応用 —

富山大 理 菊池万里 (Masato Kikuchi)

Kwapień - Woyczyński (cf. [6]) によって導入された確率変数の tangent sequence の概念は、その後、主に P. Hitzzenko によって martingale 不等式の研究に用いられている。([1] ~ [4])。その中で、tangent sequence を用いて martingale 不等式を独立増分の場合に帰着させる方法は、大変興味深くまた、有用(?) と思われるので、ここに紹介したい。

まず、tangent sequence の定義を与える。以下、確率空間 $(\Omega, \mathcal{F}, \mathbb{P})$ 及び σ -field の増大列 (\mathcal{F}_n) が与えられているものとし、便宜上 \mathcal{F}_0 は trivial σ -field とする。

定義 1 (Kwapień - Woyczyński)

(\mathcal{F}_n) -adapted かつ 2 つの確率変数列 $(X_n), (Y_n)$ が Tangent とは

$$(1) \quad \mathbb{P}(X_n \geq \lambda | \mathcal{F}_{n-1}) = \mathbb{P}(Y_n \geq \lambda | \mathcal{F}_{n-1}) \quad \lambda \in \mathbb{R}, n \in \mathbb{N}.$$

となることである。また、 (X_n) と $(-X_n)$ が tangent のとき、 (X_n) は conditionally symmetric であるという。

確率変数 X の \mathcal{G} に関する conditional distribution を $Q(X|\mathcal{G})$ と書くことにすれば (1) は、次のようになる。

$$Q(X_n|\mathcal{F}_{n-1}) = Q(Y_n|\mathcal{F}_{n-1}) \quad n \in \mathbb{N}$$

定義 2 (Kwapień-Woyczyński)

(\mathcal{F}_n) -adapted な確率変数列 (Y_n) が condition (CI) と呼ばるとは、

$$\begin{cases} Q(Y_n|\mathcal{F}_{n-1}) = Q(Y_n|\mathcal{G}) \quad \text{for every } n \in \mathbb{N} \\ (Y_n) \text{ is } \mathcal{G}\text{-conditionally independent.} \end{cases}$$

となる \mathcal{F}_n の sub- σ -field \mathcal{G} が存在することである。

P. Hitczenko (1990 [37]) は、これら 2 つの概念をうまく使って、独立な確率変数列に対して Rosenthal が示した moment inequality と martingale の場合に拡張している。つまり、

定理 1 (Hitzzenko)

可換 martingale $f = (f_n)$ と $2 \leq p < \infty$ に対し

$$(2) \quad \|f^*\|_{L^p} \leq \frac{kp}{\text{Log } p} \left\{ \|\Delta(f)\|_{L^p} + \|d^*\|_{L^p} \right\}$$

が成立する。ただし $\text{Log } p = \max\{\ln p, 1\}$ であり、 $\frac{kp}{\text{Log } p}$ は best possible.

定理 1 において、 $f^* = \sup_n |f_n|$, $d^* = \sup_n |d_n|$, $d_n = f_n - f_{n-1}$ 及び $\Delta(f) = \left(\sum_{n=1}^{\infty} E[d_n^2 | \mathcal{F}_{n-1}] \right)^{1/2}$ である。以下、記号は可換にこれらに準ずるものとする。また、 $kp/\text{Log } p$ が best possible とは (2) で $kp/\text{Log } p$ の代わりに C_p とおいたとき、 $C_p \geq kp/\text{Log } p$ とする $k > 0$ が存在するということである。

さて、(2) は、本質的には Rosenthal による (d_n) が独立の場合にはじめて示され、その後、Johnson-Schechtman-Zinn [5] による、正確な growth rate $kp/\text{Log } p$ が計算された。martingale 不等式との関連は、歴史的な背景も含めて Hitzzenko [3] に詳しい。尚 (2) と逆向きの不等式も、もち論成立するがその場合の constant の growth rate は、多数の著者による知られていて、 \sqrt{p} である。

以下に定理1の証明の概略を、tangent sequencesの応用を中心に、Hitzenkoに従って述べる: (2)の growth rate $KP/\text{Log } P$ が best possible であることについては、Johnson - Schechtman - Zinn によって (d_n) が独立の場合に) 既に示されているので、ここでは省略する。

証明の方針は次の通りである: martingale $f = (f_n)$ を 2つの martingale g, h の和に分解する。 $f = g + h$, ここに g はその difference sequence が condition (CI) をみたすもの, h は、その difference sequence が conditionally symmetric とするものである。次に、 g については Johnson - Schechtman - Zinn の結果 (i.e. independent case) に帰着させ、 h については、いわゆる "good λ 不等式" に帰着させる。以上の方針のもとに、次の手順で証明を進める。① g の処理 ② h の処理 ③ 分解の存在。まず、 g の処理から始める。

命題 1.

$g = (g_n)$ は martingale で difference sequence $(e_n) = (g_n - g_{n-1})$ が condition (CI) (定義2) をみたすとする。このとき、

$$\|g^*\|_{L^p} \leq \frac{KP}{\text{Log } P} \{ \|g\|_{L^p} + \|e^*\|_{L^p} \} \quad p \geq 2$$

が成立する。(kはξによらずよい定数>0).

証明: Johnson-Schechtman-Zinnの結果とあらためて書くと
 (ξ_n) が独立, $E[|\xi_n|] < \infty$, $E[\xi_n] = 0$ ならば

$$(3) \quad \left\| \sum_{n=1}^{\infty} \xi_n \right\|_{L^p} \leq \frac{kp}{\log p} \left\{ \left\| \sum_{n=1}^{\infty} \xi_n \right\|_{L^2} + \|\xi_n^*\|_{L^p} \right\}$$

ということである。さて、 (e_n) は condition (CI) をみたすから、
ある sub- σ -field $\mathcal{G} \subset \mathcal{F}$ を取ると

$$\left\{ \begin{array}{l} Q(e_n | \mathcal{F}_{n-1})(\cdot, B) = Q(e_n | \mathcal{G})(\cdot, B) \text{ a.s. for } \forall B \in \mathcal{B}(\mathbb{R}) \\ (e_n) \text{ は } \mathcal{G}\text{-conditionally independent.} \end{array} \right.$$

とできる。 (e_n) の \mathcal{G} -cond. independentness より、 $N \in \mathbb{N}$ に對して

$$Q((e_n)_{n=1}^N | \mathcal{G})(\cdot, dx) = \bigotimes_{n=1}^N Q(e_n | \mathcal{G})(\cdot, dx) \text{ a.s.}$$

つまり、projection $\mathcal{P}_n(x_1, \dots, x_N) = x_n$ は $Q((e_n)_{n=1}^N | \mathcal{G})(\cdot, dx)$ に
 関して独立な

$$\begin{aligned} \int_{\mathbb{R}^n} Q((e_n)_{n=1}^N | \mathcal{G})(\cdot, dx) \mathcal{P}_n(x) &= \int_{\mathbb{R}} x Q(e_n | \mathcal{G})(\cdot, dx) \\ &= E[e_n | \mathcal{G}] = E[e_n | \mathcal{F}_{n-1}] = 0. \end{aligned}$$

従って, Johnson - Schechtman - Zinn の結果 (3) より

$$\begin{aligned} E \left[\left| \sum_{n=1}^N e_n \right|^p \middle| \mathcal{G} \right]^{1/p} &= \left(\int_{\mathbb{R}^N} Q((e_n)_{n=1}^N | \mathcal{G})(\cdot, dx) \left| \sum_{n=1}^N p_n(x) \right|^p \right)^{1/p} \\ &\leq \frac{Kp}{\log p} \left\{ \left(\int_{\mathbb{R}^N} Q((e_n)_{n=1}^N | \mathcal{G})(\cdot, dx) \left| \sum_{n=1}^N p_n(x) \right|^2 \right)^{1/2} \right. \\ &\quad \left. + \left(\int_{\mathbb{R}^N} Q((e_n)_{n=1}^N | \mathcal{G})(\cdot, dx) \sup_{1 \leq n \leq N} |p_n(x)|^p \right)^{1/p} \right\} \\ &\leq \frac{Kp}{\log p} \left\{ E \left[\left| \sum_{n=1}^N e_n \right|^2 \middle| \mathcal{G} \right]^{1/2} + E[e^{*p} | \mathcal{G}]^{1/p} \right\} \quad (p \geq 2) \end{aligned}$$

とわかる。ここで, $E \left[\left| \sum_{n=1}^N e_n \right|^2 \middle| \mathcal{G} \right]^{1/2} = \sum_{n=1}^N E[e_n^2 | \mathcal{G}]^{1/2} = \lambda(\mathcal{G})$ ($\because (e_n)$ は \mathcal{G} -cond. indep.) に注意して,

$$E \left[\left| \sum_{n=1}^N e_n \right|^p \middle| \mathcal{G} \right]^{1/p} \leq \frac{Kp}{\log p} \left\{ \lambda(\mathcal{G}) + E[e^{*p} | \mathcal{G}]^{1/p} \right\} \quad p \geq 2$$

とわかる。両辺の L^p -norm を取って, $N \rightarrow \infty$ とすれば「求める結論を得る。」

次に R の処理にかかる。これは, Burkholder, Davis, Garza, Gundy らによつて, 既に大変よく知られている, 分布不等式に帰着させる方法であり, 目新しいものではない。従つてここでは, 本質的では部分に触れるだけにとどめ, 詳細は省略する。

命題 2

$R = (R_n)$ は martingale で, その difference sequence (d_n) は, conditionally symmetric (定義 1) であるとする。このとき,

$$\|f^*\|_{L^p} \leq \frac{kp}{\log p} \{ \|s(f)\|_{L^p} + \|d^*\|_{L^p} \} \quad p \geq e^2$$

が成立する。(kはpによらず)

補題 (Hilczenko)

$f = (f_n)$ は martingale で、各 $n \geq 1$ に対し $|d_n| = |f_n - f_{n-1}| \leq W_n$ なる \mathcal{F}_{n-1} -measurable r.v.'s W_n が存在すると仮定する。

このとき、分布不等式

$$\mathbb{P}(f^* > \beta\lambda, s(f) \vee W^* \leq \delta\lambda) \leq 2\varepsilon(\alpha) \mathbb{P}(f^* > \lambda), \quad \delta > 0, \beta > 1 + \delta, \lambda > 0$$

が成立する。ただし $\alpha = (\beta - 1 - \delta)/\delta$, $\varepsilon(\alpha) = \exp(-\frac{\alpha}{2} \log(1 + \frac{\alpha}{2}))$ 。

この分布不等式から、(少々細かい計算が必要であるが) 通常の方法により、 $p \geq e^2$ に対し

$$(4) \quad \|f^*\|_{L^p} \leq \frac{kp}{\log p} \|s(f) \vee W^*\|_{L^p} \leq \frac{kp}{\log p} \{ \|s(f)\|_{L^p} + \|W^*\|_{L^p} \}$$

となる。これを用いて、命題 2 は次のように示される。

命題 2 の証明: (d_n) が conditionally symmetric であるから、任意の bounded Borel function $\Phi: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$ に対し

$$(5) \quad E[\Phi(d_n, d_{n-1}^*) | \mathcal{F}_{n-1}] = E[\Phi(-d_n, d_{n-1}^*) | \mathcal{F}_{n-1}] \quad a.s$$

である。従って

$$d_n' = d_n I_{\{|d_n| \leq 2d_{n-1}^*\}} \quad , \quad d_n'' = d_n I_{\{|d_n| > 2d_{n-1}^*\}}$$

とおくと、 (d_n') , (d_n'') は martingale difference seq. である。(Davis の分解)。また、 $|d_n| + 2d_{n-1}^* \leq 2|d_n| \leq 2d_n^*$ on $\{|d_n| > 2d_{n-1}^*\}$ だから、 $|d_n''| \leq 2(d_n^* - d_{n-1}^*)$ 。故に

$$(6) \quad \|(h'')^*\|_{L^p} \leq \left\| \sum_{n=1}^{\infty} |d_n''| \right\|_{L^p} \leq 2 \|d^*\|_{L^p}$$

他方、 $W_n = 2d_{n-1}^*$ とし、 h' に上の補題 (5) を用いると

$$(7) \quad \begin{aligned} \|(h')^*\|_{L^p} &\leq \frac{kp}{\log p} \left\{ \|s(h')\|_{L^p} + 2\|d^*\|_{L^p} \right\} \\ &\leq \frac{kp}{\log p} \left\{ \|s(h)\|_{L^p} + \|d^*\|_{L^p} \right\} \end{aligned} \quad (p \geq e^2)$$

(ただし、 k は行ごとに異なる。) (6), (7) より容易に命題 2 を得る。

かくの如く、命題 1 又は 2 の条件をみたす martingale g, h については、目的の不等式が得られた。従って、あとは任意の martingale $f = (f_n)$ が、このような g と h の和に分解できる

ことを示せばよい。以下に、その方法を述べるが、ここが
Hilczenko の論文の essential な部分といえようである。

命題 3

$\mathcal{P}_n: \mathbb{R}^N \rightarrow \mathbb{R}$ は n -th projection, $\mathcal{B}_n = \sigma(\mathcal{P}_1, \dots, \mathcal{P}_n)$,
 $\mathcal{B} = \bigvee_{n=1}^{\infty} \mathcal{B}_n$, とし, $\bar{\Omega} = \Omega \times \mathbb{R}^N$, $\bar{\mathcal{F}} = \mathcal{F} \otimes \mathcal{B}$, $\bar{\mathcal{F}}_n = \mathcal{F}_n \otimes \mathcal{B}_n$
 $n=1, 2, \dots$ とおく. 任意の (\mathcal{F}_n) -adapted sequence (d_n) に対し

$$\bar{\mathbb{P}}(H) = \int_{\bar{\Omega}} \mathbb{P}(d\omega) \int_{\mathbb{R}^N} \bigotimes_{n=1}^{\infty} Q(X_n | \mathcal{F}_{n-1})(\omega, d\alpha) I_H(\omega, \alpha)$$

($H \in \bar{\mathcal{F}}$)

$$\bar{d}_n(\omega, \alpha) = d_n(\omega), \quad \bar{e}_n(\omega, \alpha) = \mathcal{P}_n(\alpha)$$

とおくとき、次が成立:

- i) (\bar{d}_n) と (\bar{e}_n) は $(\bar{\mathbb{P}}$ と $(\bar{\mathcal{F}}_n)$ に関して) tangent.
- ii) (\bar{e}_n) は $\mathcal{G} = \mathcal{F} \otimes \{\phi, \mathbb{R}^N\}$ に関して condition (CI) を満たす
- iii) (d_n) と (\bar{d}_n) , 及び $(E[\Phi(d_n) | \mathcal{F}_{n-1}])$ と $(\bar{E}[\Phi(\bar{d}_n) | \bar{\mathcal{F}}_{n-1}])$ の有限次元分布は等しい. ただし, Φ は bounded Borel function, $\bar{E}[\cdot | \bar{\mathcal{F}}]$ は $\bar{\mathcal{F}}$ に関する conditional expectation である.
- iv) \bar{d}_n と \bar{e}_n は $\bar{\mathcal{F}}_{n-1}$ -conditionally indep. ($n=1, 2, \dots$) である.

この補題の証明は簡単なので略す。

定理1の証明: $p \geq e^2$ としよう。与えられた martingale $f = (f_n)$ の difference sequence (d_n) に対し、命題3の条件をみたす $(\bar{d}_n), (\bar{e}_n)$ をある確率空間 $(\bar{\Omega}, \bar{\mathcal{F}}, \bar{\mathbb{P}})$ 上にとり

$$\bar{f}_n = \sum_{k=1}^n \bar{d}_k, \quad \bar{g}_n = \sum_{k=1}^n \bar{e}_k, \quad \bar{h}_n = \sum_{k=1}^n (\bar{d}_k - \bar{e}_k)$$

とおく。 (\bar{d}_n) と (\bar{e}_n) は tangent だから

$$\bar{\mathbb{E}}[\bar{e}_n | \bar{\mathcal{F}}_{n-1}] = \bar{\mathbb{E}}[\bar{d}_n | \bar{\mathcal{F}}_{n-1}] = \mathbb{E}[d_n | \mathcal{F}_{n-1}] = 0,$$

i.e. $(\bar{d}_n), (\bar{e}_n)$ は共に martingale difference である。また

$$\begin{aligned} \Delta_N(\bar{g}) &\equiv \left(\sum_{k=1}^N \bar{\mathbb{E}}[\bar{e}_k^2 | \bar{\mathcal{F}}_{k-1}] \right)^{1/2} = \left(\sum_{k=1}^N \bar{\mathbb{E}}[\bar{d}_k^2 | \bar{\mathcal{F}}_{k-1}] \right)^{1/2} \\ &\stackrel{d}{=} \left(\sum_{k=1}^N \mathbb{E}[d_k^2 | \mathcal{F}_{k-1}] \right)^{1/2} \equiv \Delta_N(f) \end{aligned}$$

両辺の L^p -norm ε とし $N \rightarrow \infty$ とすると $\|\Delta(\bar{g})\|_{L^p} = \|\Delta(f)\|_{L^p}$.

次に (\bar{d}_n) と (\bar{e}_n) が tangent だから

$$\bar{\mathbb{P}}(\bar{e}^* > \lambda) \leq 2\bar{\mathbb{P}}(\bar{d}^* > \lambda) = 2\mathbb{P}(d^* > \lambda) \quad \lambda > 0$$

となる。最初の不等号は、2つの tangent sequences の間に常に成立するもので証明は容易である。(Hitzzenko [1] or [2])

$$\Delta(\bar{h}) = (\Delta(\bar{f})^2 + \Delta(\bar{g})^2)^{\frac{1}{2}} \leq \Delta(\bar{f}) + \Delta(\bar{g})$$

であることより従う。(8)と(9)を合せると容易に定理1が得られる。

□

参 考 文 献

- [1] P. Hitczenko, Comparision of moments for tangent sequences of random variables, Prob. Th. Rel. Fields 78 (1988), 223-230.
- [2] _____, Best constants in the decoupling inequality for non-negative random variables, Stat. Probab. Lett. 9 (1990), 327-329.
- [3] _____, Best constants in martingale version of Rosenthal's inequality, Ann. Probab. 18 (1990), 1656-1668.
- [4] _____, Upper bounds for the L_p -norm of martingales, Prob. Th. Rel. fields 86 (1990), 225-238.
- [5] W.B. Johnson, G. Schechtman, and J. Zinn, Best constants in moment inwqualities for linear combination of independent and exchangeable random variables, Ann. Probab. 13 (2985), 234-253.
- [6] S. Kwapien and W.A. Woyczynski, Tangent sequences of random variables: Basic inequalities and their applications. Proc. Conf. on Almost Everywhere Convergence in Probab. and ergodic Theory, Academic, New - York, (1989), 237-265.